

内面への道の探求者・ヘッセ

——『荒野のおおかみ』をめぐって——

はじめに

「すべての人間の生活は、自分自身への道であり、一つの道の試みであり、一つのささやかな道の暗示である。どんな人もかつて完全に彼自身ではなかった。しかし、めいめい自分自身になろうと努めている」。(『デミアン』)

この引用文は、ヘルマン・ヘッセ(一八七七一—一九六二)著『デミアン』のはしがきに書かれているものであるが、この作品は、一九一七年、ヘッセ四二歳の時に書かれたものである。ヘッセの文学を叙情的な青春小説の前期と、内面への道(自己自身への道)を探求する後期とに分けるとすれば、『デミアン』はその前期と後期の節目にあたる作品である。その他、後期の作品に属するものに『シッダールタ』、『荒野のおおかみ』、『知と愛』(原書名・ナルティスとゴルトムント)などがある。

前期から後期への移行の大きなきっかけは、一九一四年から一九一八年の第一次世界大戦を経験したことであると考えられる。その後、一九三九年から一九四五年には第二次世界大戦を経験し、その間、彼は反戦姿勢を明確にしていたのでナチス支配下のドイツでは、ヘッセの作品は好ましくならぬ文学とみなされ、紙の配給を停止

されることもあった。

このような状況のもとで内面への道を探求し続けたヘッセの作品の中には、彼自身の苦しむ姿が表現されている。そしてここに表現されている事柄を、読者一人ひとりが自分の生きる上での問題として読み進めていくならば、そこには各人の人生哲学が問われているように思われる。

『ヘルマン・ヘッセの文学』という本の著者佐古純一郎氏は、冒頭で引用した文章を、次のように読むことを読者に勧めている。

「私の生活は自己自身への道であり、一つの道の試みであり、一つのささやかな道の暗示である。私は完全に自分自身でなかった。しかし私は自分自身になろうと努めている」。そのように読むことによって、小説の中からヘッセは常に「君はどうなのだ」と問いかけてくると、佐古氏は言うのである。

たしかにヘッセの後期の作品には、そのように読者に問いかけてくるものがある。そしてその問いかけは、哲学的なものである。なぜなら、彼の後期の作品には深い哲学的思索に裏付けられているものが多いからである。

今回、『荒野のおおかみ』を取り上げた理由は、後期の作品の中でも特に哲学的な思索が認められるからである。すなわちこの作品の

松田幸子

中には伝統的なヨーロッパ精神の文化と、アメリカ的な感性文化の入り混じった時代の中で、どのように生きたらよいかと悩む主人公が書かれているが、その悩む姿はまさに一人の哲学者のようである。そこでこの作品の中に書かれている「自己自身への道を生きる」とは何かを以下で考察してみたいと思う。

第一章 『荒野のおおかみ』の構造とハリー・ハラ

『荒野のおおかみ』という作品は、一種独特の構造を持っている。この作品は主人公であるハリー・ハララの「手記」という形で書かれているが、この「手記」を渡された第三者がそれを編集し、そこにみずから序文を書いて一冊の本にまとめたという形をとっている。さらに手記の中には書き手不明の「荒野のおおかみについての論文・・・狂人だけのために・・・」も挿入されている。このような構造をとっているのは何故か。それはハリー・ハラの手記があまりにも深く体験された心の過程を写し出しているから、それは読者に非現実的なものであると受け取られる心配があるからであると推察できる。すなわち「手記」を受け取った序文の書き手（ハリー・ハララの下宿先のおおかみの甥）は、普通の市民生活をいとむ人であり、また「荒野のおおかみについての論文」の書き手は、客観的にハリー・ハララを観察する人物であるという設定から、この二人の見たハリー・ハララ論の存在によって「手記」の中身が現実性を持つてくるのである。

序文の書き手のハリー・ハララの印象は次のようなものである。「彼は実際、ときおりみずから名のついていたように、荒野のおおかみで、私の世界とは別な世界の、異様な、野性的な、そしてまた内気な、いやまったく内気な存在でした」。「彼はあくまで、ひと目見

たときすぐに、すぐれた、珍しい、なみはずれた天分のある人間だという印象を与えました。・・・彼は他の人間より以上に考えており、精神的なことにかけては、ほとんど冷静なぐらいの客観性を持っていました。またおおよそ野心なんかなく、光彩を放とうとか、他の人を説得しようとか、持説を固執しようとか願わない真の精神的な人だけが持ちうるような、どっしりした思索のあとと知識を持っていました」。

他方、「論文」の語るところによれば、荒野のおおかみを自称しているハリー・ハララという人は

「実際やはりまさしく荒野のおおかみであった。頭の良い人間たちの学びうることをたくさん学んでいた。そしてかなり賢い男であった。しかし彼が学ばないことがあった。それはつまり自分と自分の生活に満足することだった。・・・それはおそらく自分はほんとうの人間ではなくて、荒野から出てきたおおかみだということを心の底でいつも知っていた（あるいは知っていると感じていた）ことから来ていた」。

「彼の気持ちでは、あるときはおおかみとして、あるときは人間として生きていたのであるが、彼がおおかみであるときは、彼の人間の人間がいつも傍観し、批評し、審判しながらうかがっており、彼が人間であるときはおおかみが同様に振る舞った」。

おおかみから見れば人間の善行などは、ぞっとするほど滑稽で馬鹿らしいものであった。したがってハリー・ハララの心の中では人間とおおかみの両方が並んで存在するのではなく、両者はたえずとも天をいただかずという敵対関係にあったのである。そのような状態のもとで、人を愛すると常に彼は相手を不幸にしたのである。

「多くの人は彼を繊細な賢い独特な人として愛したが、突然彼の内

におおかみを発見せずにいられなくなると、恐れをなし幻滅を感じたのである」。

ここで、おおかみの性質と言われるものは、野性的で、自由を好む性質であり、市民的の生活の中では何一つ満足をみいだせないような性質である。従つて二つの性質、人間的性質とおおかみの性質を持つハリ・ハラは、一般的市民生活とはもっとも縁遠い人であった。

第二章 荒野のおおかみ・ハリ・ハラの悩み

ハリ・ハラを外側から観察すると前章で述べたような人であり、その生活は常に不安で落ち着かないものであった。彼は五十歳前の、市民生活とは調和できない人であった。そこで、市民というものを、ヘルマン・ヘッセはどのように考えていたかを次に考察してみたい。

ヘッセが市民とか市民生活という言葉を使用する場合には、調和の試み、中間を見いだそうとする試みという言葉を使用している。『荒野のおおかみ』の中で述べているヘッセの言葉を説明すると、人間は精神的なもの、神的なものへと近付こうとし、聖者の理想に近付こうとする可能性を持っている。また逆に人間は本能的な生活や官能の欲望に身をまかせ、刹那的な享樂を得ようと全勢力を傾けようとする可能性も持っている。しかし、市民というものはそのどちらにも極端にはならず、両者のほどよい中間で生きようと願うものである。市民は清潔で健康な地帯で生きようと試みるものである。そのために市民は、絶対的なものや極端なものに向けられる生活とか、感情の強烈さなどを犠牲にしなければならない。その理由は、我が身の安全を大切にし、良心の安らかさや安楽な生活を第一

と考えるからである。それ故市民というものは、常に自分自身を犠牲にすることを恐れてびくびくして生活しているので、臆病な人間ともいえる。市民は一人の権力者を望まず、何事も法律のもとで多数決を望むものである。

このような市民的の世界についてヘッセは、『デミアン』の第一章「二つの世界」の中で次のように述べている。ここでいう二つの世界とは、明るい世界と暗い世界のことであり、市民的世界は明るい世界と位置付けられている。「この世界の大部分は私に親しみが深かった。それは父と母、愛と厳格、模範と教えとにほかならなかつた。この世界にはなごやかな輝きと明朗さと清浄さがともなつていた。ここには、穏やかな親しみのある言葉、洗われた手、清い着物、よいしつけなどがつきものだった。ここでは朝の賛美歌が歌われ、クリスマスが祝われた。この世界には未来に通ずるまっすぐな線と道があつた」。このような明るい平和と秩序と、義務と良心的な世界にたいして、もう一つの正反対の暗い世界があるとヘッセは述べている。たとえばその暗い世界では、犯罪とか、姦淫とか、暴力的なものが存在した。

さらにまた『放浪の旅』の中には、市民になれない自分に言い聞かせる文章がある。

「お前は浮浪者でいて、おまけに芸術家たることはできない。なおそのうえに市民で幸福で、上品な健全な紳士たることはできない。お前は陶醉してみたいという、そんなら悪酔いの苦しみだつて覚え知るがいいさ！お前は太陽の輝きややさしい空想を肯定するといふ。それなら汚辱や嘔吐にたいしても肯定をいふがよい、……あらゆるものにたいして肯定をいふがよい、なに一つにたいしてもお前を無理強いに押さえることはない、なに一つごまかし偽ろう

とするな！お前は市民などではない、お前はまたギリシア人でもありはしない、お前は調和ある人間でもなし、お前自身を統制できる人間でもない。」(『ヘッセ全集』第二巻の中の『放浪の旅』、芳賀壇訳)

このようにヘッセのいくつかの作品の中から市民の意味を考えてみると、市民とはギリシア人のように民主的な生活をおくり、法律を守りながら生きる側面も持っているがまた、極端に走らず調和を好み、常に清潔で健全な世界に住み、我が身の安全を願ひ、したがって自分自身を犠牲にすることを恐れて生きるという側面も持っている生活衝動の弱い人々のことである。そのような市民階級からは聖者も精神の殉教者も出ないし、英雄も芸術家も出ないのである。

ハリー・ハラールは、いま述べたような市民的世界に住み続けながら、しかも又人間の性質以外におおかみの性質も持っているので市民的世界の外に立っており、自分を孤立した人間と感じていたのである。彼は「手記」の中で語っている。「市民的な枠の中に生き続けていたとはいえ、私はやはりこの世界のただ中であって感じ方や考え方のすべてにおいてよそのものであった。宗教、祖国、家族、国家などは私にとって価値を失い、もはや私にとってなんの関係もなくなった」と。このことを具体的にハリー・ハラールは次のように述べている。「そのときどきの自我は、粉碎された。一度は、私は市民的名声を財産もろとも失った。そして、それまで私にたいして帽子を脱いだ人々から尊敬を受けることをあきらめねばならなかった。その次には、一夜で私の家庭生活が崩壊した。精神病になった妻が、私をくつろいだ家庭から追い出した。愛と信頼が一挙に憎しみと死にもの狂いの戦いに変わり、隣人たちは同情と軽蔑をもって

私を見送った。あのころ私の孤立が始まった」のである。そして生活はきびしく、むずかしくなり市民的な生活から徐々に遠ざかっていき、危険な状態になったのである。具体的に言えば、精神性の高いハリー・ハラールには、その時代の人々が喜ぶものに満足できないのは何一つ見いだすことができなかった。たとえばジャズなどのようなアメリカ的な音楽や、その他の大衆娯楽、無責任な政治や言論機関のおしゃべりなど、すべてにたいして不満を持ち、むなしさを感じたのである。

この頃の心理状態を、「手記」の書き手であるハリー・ハラールは次のように述べている。「ニーチェの秋の歌の霧にも似た、いよいよ希薄な大気の中に私をつれていく、この道の継続を願うべき理由を、私は持たなかった」。

ここでヘッセはただニーチェ(一八四四—一九〇〇)の秋の歌というだけで、引用はしていないが、その歌をニーチェの詩集からここに引用しておく。

秋

秋の霧 めぐりを流れて、——— 灰色の霧に

溶けつつ

かそけくも行き過ぐは 山の霊か。

紅き眼なす日輪

かすみつつ 頭を傾け、いよいよかすみて

浪間の墓に くだり降りゆく。

秋の霧 めぐりを流れて、——— 湿ろう霧のなか

夜をおそれつつ

ざわめくは 生きるに倦みし木の葉むら。

夏をよるこび 秋をかなしむ

鳥たちの 空を横切りてとど。

秋の霧 めぐりを流れて、—— 梟 呼べば、

重苦しげに

そそめくは樅の木、呻くは檜の木。

ものみな 夜闇に溶けつつ

青白く霧中に浮かびて

墓のめぐりに打ち震う。

『ニーチェ全集』16巻「初期詩集」(中島義生訳)より。

このニーチェの「秋の歌」が象徴するように、ハリー・ハラは死を意識しつつさ迷う日々を続けて、ついに自殺の決意をするまで追い込まれるのであるが、そのきっかけをつくったのは一つの事件であった。それはある夜、ハリー・ハラが孤独と絶望のうちに死を意識しながら町をさ迷っていた時、以前、まだ一般の市民と調和を保って生活できたころの知人で、若い大学の教授に会い、夕食に招待されたのであった。そこで見聞したことがらはすべて彼の気にいらなかった。

たとえばその家に飾ってあった一枚のゲーテの肖像画であった。ハリー・ハラはゲーテを不滅の人として尊敬していたのであるが、そこで見たゲーテの肖像画は、ゲーテの内面性のひとかけらも見えないような、如何にも一般の市民に気に入られるような美しい老紳士に描かれていた。その肖像画はハリー・ハラをいらいらさ

せ、むかむかさせるのに十分であった。

またその時の話題も、彼にいつそう不協和音を感じさせたのである。その話題は、戦争を煽動する党の機関誌に書かれている事柄であった。教授は、その機関誌がハリー・ハラと同名の(実は本人)ジャーナリストを反戦思想家と激しく非難している文章を見て、その書き手のハリー・ハラは祖国にたいする裏切り者であると非難したのである。はじめは適当に教授に話を合わせていたが、話を合わせている自分自身に腹が立ってきて、ついに彼の心の中のおかみの部分が教授に噛み付いたのである。

まず教授夫人が大事にしているゲーテの肖像画をけなし、今、話題になっている反戦思想家は、実は私本人であると名乗り、その場で自分の反戦思想をとうとうと述べたのである。現在の軍国主義者がもしも「盲目的に狂乱して新たな戦争に突進しないで、せめていくらかの思考能力のある人間が、理性と平和への愛を信条とすることを告白したら、われわれの国のためにも、世界のためにもなるだろう。それでごめんこうむる」と彼は立ち去ったのである。

この事件は、ハリー・ハラが市民的な世界へ告別をしめた決定的瞬間であった。同時にこれは彼の心の中のおかみの完全な勝利でもあったのである。しかし人間偏重のハリー・ハラは、自分のとった行動がたまらなく嫌になり自殺しようとするが、その最後の瞬間の恐怖に耐えられず、その事件のあった夜はおそくまで町をさ迷い歩いたのである。ここには人間とおかみの二つの心を持つハリー・ハラが、もはや市民的生活を断念しなければならなくなり、社会と自分の分裂に苦悩し、出口を見いだせず迷途をさましながら、ただ息苦しさと自己嫌悪の中で窒息しかけて自殺を執行する一歩手前の心理状態がよくあらわされている。

では、この状態からの脱出にはどんな方法があるのだろうか。この小説『荒野のおおかみ』の中に挿入されている荒野のおおかみについて書かれた「論文」では、二つの方法が暗示されている。

その一つは、自殺の誘惑とさまざまに戦ってきた荒野のおおかみが、四十七歳になった時、あるユーモアを思いついたことである。それは五十回目の誕生日を自殺を執行する日と決めたことである。そうすれば、彼が病気になるうと貧乏になるうと、どんなに苦しい事が起っても、すべては期限つきであると思えることである。すべてはせいぜいこの数年間の月日の間にすぎず、その月日は日ごとに減っていくと思えるからである。

その二つ目は、人間とおおかみの二つの性質を持つ荒野のおおかみの一つの心の中で両者が敵対しているのであるが、つねにおおかみの活動を押さえこもうとするが故に、時々おおかみの心が爆発し、それがハリー・ハラーの苦悩の原因になるので、そのおおかみの部分を開放し、自由にしてやればよいということになる。

ここで荒野のおおかみと称するハリー・ハラーが、自分の心の中には人間とおおかみの二種類の性質だけが存在していると規定しているのが間違いであると「論文」の書き手は考えている。すなわち人間の性質とは異なる部分を、すべておおかみの性質とひとまとめにし、それを抑圧し排除しようとするのが間違いであるというわけである。実はおおかみと名付けているものの中には、狐、竜、虎、猿、極楽鳥などが住んでいる。これらは彼の心の大部分を形成するものであるから、そのことに人は気付き、それらを開放しなければ豊かな人格の形成は実現できないというのが、「論文」の書き手、つまりヘッセの言い分である。

しかし「論文」の予想とは逆に、実際のハリー・ハラーは人間の

性質以外はすべておおかみの性質と考えており、そのおおかみの部分を抑圧し、精神性を高めるだけが人間形成に必要であると思いついてきた。その背後には、情愛は深い、厳格で非常に敬虔な両親と教師からの間違った教育の結果であるとヘッセは指摘するのである。ヘッセが精神性を高めるだけの教育を非難していることは、他の作品にもしばしば見られる。

たとえば『車輪の下』では、柔らかな微妙な子供の心理を理解しない教育という車輪が、無慈悲にも子供を犠牲にする過程が書かれている。

『車輪の下』の主人公のハンス・ギーベンラートは、町の推薦で国家試験を受け二番の成績で合格し、神学校へ入学したような秀才であった。そのハンスは、受験勉強時代から子供らしい喜びを封じられ、ひたすら知識の詰込みを強制されていた。神学校へ入学してからは、高度な授業と厳しい規制づくめの寮生活によって少年らしさは失われ、彼は心と体のバランスを失い学校を去ったのである。それに対して『車輪の下』では次のように書かれている。

「学校と父親や二、三の教師の残酷な名譽心が、傷つきやすい子供のあどけなく彼らの前にひろげられた魂を、なんのいたわりもなく踏みじることによって、このもろい美しい少年をここまで連れてきてしまったことを、だれも考えなかった。なぜ彼は最も感じやすい危険な少年時代に毎日夜中まで勉強しなければならなかったのか。なぜ彼から飼いうさぎを取り上げてしまったのか。なぜラテ語学校で故意に彼を友だちから遠ざけてしまったのか。なぜ魚釣りをして、ぶらぶら遊んだりするのをとめたのか。なぜ心身をすりへらすようならぬ名譽心の空虚な低級な理想をつぎこんだのか。なぜ試験のあとでさえも当然休むべき休暇を彼に与えなかつたのか。なぜ試験のあとでさえも当然休むべき休暇を彼に与えなかつたのか。なぜ試験のあとでさえも当然休むべき休暇を彼に与えなかつたのか。」

たのか。

いまやくたたくにされた小馬は道ばたに倒れて、もう物の役にもたたなくなつた。

ヘッセの考えによれば、秀才であるが、純真な自然児でもあつたハンス少年が感性をゆがめられ、心と体のバランスを失つてしまつたのは、教育に携わつた大人たちの責任であるというわけである。

次は「論文」に書かれていることを前もつて読んでいる「手記」の書き手（ハリー・ハラ）はどのように自分自身への道を発見し、生きていくかを第三章で考察する。

第三章 自分自身への道

一・ヘルミーネとハリー・ハラ

夜中までさ迷い歩いた後、ハリー・ハラは、自殺の誘惑から逃れるように駆け込んだ酒場で出会つたのが、わかくて美しい娼婦ヘルミーネであつた。ヘルミーネはこの作品の中では、ハリー・ハラが自分自身への道を発見するための、第一段階までの導き手として書かれている。前に考察したように、ハリー・ハラが自殺を考へるまでに追い込まれた原因は、彼の心の中に住むおおかみの性質の部分が人間の性質の部分を持ち負かしたことにあつた。そのことにより、ハリー・ハラは市民生活から脱落し、孤独と絶望のうち死の誘惑と戦いながら町をさま迷い歩いたのであつた。

ヘルミーネは、今、目前にいるハリー・ハラが苦悩しているのを見て、その悩みから開放する方法の一つとして社交ダンスを習うことを勧め、彼女の友人の娼婦と性的関係を持つための段取りもした。精神性の高いハリー・ハラをその気にさせるまでのヘルミー

ネの言葉には、彼女の深い人生観が表れている。

ダンスの習得を勧めるヘルミーネに、それは一度も経験がないの無理であると言うハリー・ハラにたいして、「じゃあ、あんたは踊れないのね？ 全然ね？ ワンステップさえ？ そのくせあんたは、生きるためにどんなに骨をおつたか、誰にもわかりやしない、と言いはるのね！ 大げさなことを言ったのね。あんたの年ではもうそんなことをするもんじゃないわ。そうよ、踊ろうとさえしないで、生きるために骨を折つたなんて、どうして言えるの？」。

研究をしたり、音楽をやったり、本を読みそして書き、旅行をしたりして人生を送ってきたので、ダンスは習わなかつたと言いつつハリー・ハラにたいして

「あんたは人生について妙な考えを持っているのね！ いつもむずかしい複雑なことをやってきたくせに、簡単なことは全然習わなかつたの？ 時間も興味もなかつたの？ まあどうでもいいわ、あなたがたいことに、私はあなたのお母さんじゃない。でも、人生を思う存分ためしてみたが、何も見つからなかつたともいうようなふりをなさるのは、いけないわ！」。

僕は気が狂っていることは承知しているんだから叱らないでほし
いと言うハリー・ハラにたいして、

「何をおっしゃるの、よまいごとはよしてよ！ あんたはちつとも気が狂つてなんぞいないわ、教授さん、それどころか、私から見れば、あんたは気が狂つていなすぎるんだわ！ あんたはばかげた流儀で賢いんだ、と思うわ、まったく教授らしくね。さあ、もうひ

とつパンを食べて！ そのあとで話の続きをして」。

ヘルミーネについてダンスを習い始めた頃、ハリー・ハラーが荒野のおおかみについての「論文」を読んだことを思い出し、その論文の中では、人が一つないし二つの人格から成り立っているという考えは空想であり、間違っていると書いてあったと話すことにたいして

「それは大いに同感だわ。たとえば、あんたの場合は精神的なものがたいそう高く発達しているかわり、いろいろな小さい処世術にかけてはひどく遅れているわ。思想家ハリーは百歳だけど、踊り手ハリーはやつと半日かそこらの赤ん坊よ。私たちがこれからそれを仕込んでいくの。おなじく小さい小さくてばかりで発育の悪い小さいきょうだいたちもみんな」とヘルミーネは言った。

そのような会話を通してダンスを習い、次第にダンスの面白さがわかるようになったハリー・ハラーは、ついに次のような考えにたどりついた。「私は今、絵のようにはつきりと自分のこれまでの人格の錯覚を目の前に見た。自分が偶然長じていたいくつかの能力や修練だけを、私は振りまわして、ハリーという男の像を描き、ハリーという男の生活を生きてきた。そのハリーはじつは、文学や音楽や哲学の非常に繊細に訓練された専門家にはかならなかった。——私という人物の残余の全部を、能力や衝動や努力の残余の全混沌を、私はわずらわしいものと感じ、荒野のおおかみという名をつけたのだった」。

ここではじめてハリー・ハラーは自分の人生のあやまちを認めたのである。自分の心の悩みの原因を知り、そこから抜け出す道を彼

はかすかに見いだすことができたのである。ハリー・ハラーのダンスの腕前は、ヘルミーネから舞踏会に誘われるまでに上達した。

また彼女の友人との性的体験にも満足し、ハリー・ハラーは幸福を感じつつも、その幸福も長続きしないことをさとり、もっと別の次元の幸福を求めようになる。そのことを彼から知らされたヘルミーネは、

「今日のこの単純で気楽な、わずかなものに満足している世間について、あなたはあんまり注文が多すぎ、ががつしすぎているわ。世間はあなたなんか吐き出してしまいわ。あんたは世間にとつて次元を一つ多く持ちすぎているのよ。・・・」と答えた。しかしここでヘルミーネは、次元を一つ多く持つこと、すなわちより高いどこまでも続く幸福を求めることを非難しているわけではない。ヘルミーネ自身も次元を一つ多く持ちすぎる一人であると告げ、その一つ次元を多く持つ人は、この世界の空気のほかに別の空気がなければ、この世の時間のほかに永遠があるのでなければ生きられないのだ、ということヘルミーネは述べている。このことは、ヘルミーネが永遠の真実の国が存在することを信じていることを意味している。そこにゲーテの詩、モーツアルトの音楽、その他、名のない人々の真実の行為もその永遠の真実の国に属しているのである。このような国が存在するということは、ハリー・ハラーがゲーテやモーツアルトの話とともにしばしばヘルミーネに語ったものであるが、賢い彼女はそれを具体的に示しただけのことであった。そのことはわかっているが、ハリー・ハラーは、彼女の教えを有難く思い、同時に既に彼女に恋している自分に気がついていくのである。ではこの永遠で真実の国へはどのようにすれば到達できるのであ

ろうか。この疑問は次に登場してくるパブロが解決してくれることになる。

二・パブロとハリイ・ハラ

ハリイ・ハラは仮装舞踏会の当日、サキソフォンの演奏者パブロと知り合いになった。パブロはヘルミーネの友人であり、舞踏会終了後ヘルミーネとハリイ・ハラを魔術劇場に招待した。その劇場への入場は狂人だけが許され、入場料は知性を支払うことが決まりであった。入場後、ヘルミーネとハリイ・ハラは、パブロから黄色の巻き煙草と不思議な味のする液体を勧められた。そしてパブロは話し始めるのである。

「ハリイさん、今日いささかあなたにおもてなしできるのは、私にとって喜びです。あなたは生きていることにたびたび飽き飽きしてこの世を去ろうと努力しましたね？ この時間を、この世界を、この現実を捨てて、あなたにふさわしい別の現実、時間のない世界にはいろいろとあこがれています。そうなさい。そのために招待したのです。その別な世界がどこに隠されているか、あなたはごぞんじです。あなたの求めるものが、あなた自身の魂の世界だということをごぞんじです。あなた自身の世界が見えるように手伝ってあげること、それがすべてです」。

このパブロの言葉から、魔術劇場はハリイ・ハラがあこがれていた「永遠」の国を示すための劇場であることがわかる。入場してすぐ口にした黄色い煙草と不思議な液体によって幻覚症状が起こっているハリイ・ハラは、この劇場の中で、彼がこれまで無意識のうちに抑圧してきたおおかみの世界を、仮想現実として次々に体験させられることになった。魔術劇場の最後の場面では、スクリーン

の上に、裸のパブロとヘルミーネがぐっすり眠って添い寝している場面が写しだされていた。それを見たハリイ・ハラは、嫉妬に狂い、スクリーン上のヘルミーネをナイフで殺害してしまったのである。そのことをハリイ・ハラは実際にヘルミーネを殺してしまったと錯覚し、心を乱してしまった。現実と映像を混同したハリイ・ハラは、その罪によって嘲笑の刑に処せられることになった。その時パブロは言った。

「あなたはあの時、すっかり我を忘れて、私の小劇場のユーモアをぶち壊し醜態を演じましたね」。

このパブロの言葉からわかることは、ハリイ・ハラが求めている永遠の国、真実の国に入るには、この世の中の現象を悲壯にとりすぎないだけのユーモアを持つ必要があることを教えているのである。つまりパブロのおしえるハリイ・ハラへのこれからの進むべき道は、ユーモアを学んで魂の拡大を試みることである。

おわりに

以上のようにハリイ・ハラへのこれから進むべき道は、ユーモアを学んで永遠の国、真実の国をこの世の中に見いだすことである。このユーモアについてここで哲学的に考察してみることにする。

ユーモア (humour, 英語: Humor, 独語) は、ラテン語の humor に由来し、平凡社の『哲学辞典』では、有情滑稽と訳されており、風刺と対比されている。風刺の攻撃的性格にたいして、ユーモアは寛容的愛情的性格と解釈されている。つまり、笑いによって対象を否定しつつも、その対象を愛しながら肯定するのがユーモアであると理解できる。このような意味のユーモアをもってハリイ・ハラが、現実の世界を一定の距離をおいて眺めることができるならば、

その現実の中に、別の世界の存在を認識することができるとヘッセは言うのである。

『荒野のおおかみ』の中でハリー・ハラールは、しばしば彼が不滅の人々として尊敬しているゲーテとかモーツアルトと夢の中で話をする場面がある。

たとえば、モーツアルトがラジオでヘンデルの音楽を聞きながら、ハリー・ハラールに向かって

「ヘンデルはこんな鼻持ちならぬ現れ方をしてもやはり神々しいのだ」と言う場面がある。

つまりラジオは感覚的な美しさを音楽から奪ってしまうが、音楽の根本的精神まで殺すことはできない。それゆえその精神をよく聞きとることがたいせつであると、モーツアルトは語っているのである。伝統的なヨーロッパ精神の文化を認めているハリー・ハラールが、アメリカナイズされた音楽などはうるさいばかりで受け入れることができないと不満ばかり言いつのるのを見て、モーツアルトは笑いとばすのである。こんなものは本当の音楽ではないと力んでいる彼にたいしても、もっとユーモアをもって現実に向かい合えば、その中にも音楽の根本的な精神は聞きとれるものだとモーツアルトは教えていたのである。

ちょうどそのように、人生全体も真剣にとらえるに値するもののみを真剣にとらえ、その他のことは笑いとばすだけのユーモアを学ぶ必要があると、作者ヘッセはここで述べているのである。そのためには、人は精神的なもののみを尊重し、感性的なものを軽蔑しながら生きることをやめ、(おおかみを押さえ込むのをやめ)、両者を統一し豊かな人格を持って生きることが大切であると、ヘッセは主

張しているとは私は考える。そのように生きてこそ、人はもう一つ次元の高い永遠で真実の国を、目の前の現実の世界の中にもつけることが出来るといふヘッセの考えは哲学的である。

参考文献

Hermann Hesse, *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. Der Steppenwolf.

『荒野のおおかみ』ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳、新潮文庫。

『デミアン』ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳、新潮文庫。

『車輪の下』ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳、新潮文庫。

『ヘルマン・ヘッセの文学』佐古純一郎、朝文社。

『ニーチェ全集』十六卷、理想社。

『ヘルマン・ヘッセ全集』第二卷、ノーベル書房。